

「聞くこと・話すこと」の学習指導

——「問答」のばあい——

梅 下 敏 之

一 研究のねらい

高校生に「聞くこと・話すこと」の学習として、「問答」を実習させた。筋道のたった話し方と相手の意見に耳を傾ける態度とを指導するためである。方法としては、モデルを使って学習の手引きとなる資料を作り、それを活用して実習し、自己評価をさせた。その過程及び結果を考察して、「問答」を授業でとりあげるばあいの問題を明らかにしていきたい。

二 生徒の実態

対象にしたのは普通科二年の二クラスで、全員大学進学希望者である。時期は昭和五年一〇月であった。対象生徒九〇名のうち約二〇名は、一年生の時、私が「現代国語」を担当し、「座談会」を実習させている。その学習のねらいは「①自己の話し方の実態把握と反省をさせる。」と「②座談会のあり方と話の進め方を考えさせる。」であった。①の目標はある程度到達しえたが、②の目標の方は、座談会の性格分析の不徹底もあって目標に近づくことができなかった。

三 問答の性格と学習する意義

言語活動を学習する場合、その活動の性格をつかんでおく必要がある。例えば「座談会」を学習する時、座談会とは何かを知っているば、その何かが反省、評価の基準になろう。

そこで、人々は問答をどうみているかを調べてみた。石田佐久馬氏は、問答を対話の中に位置づけて、性格を説明している。「一対一で話し合うとき、話題を一つに限定しないで話のすすむにつれて、自由に話題を変え、話を展開することがあります。これが対話の一般的な姿ですが、ときには話題を限定して、その話題を解決するためふたりで話しあうことがあります。これは『問答』といえます。『問答』を限定して、その話題を解決するために話しあうことを問答といい、自由に話題を変え、話を展開することを対話と呼んでいる。

西尾実氏は、対話・問答を言語活動の基本に位置づける。「我々の言葉の生活の中で談話と呼ばれる口言葉のやりとりが発生的にいても、理論的にいっても、文章活動の土台であり、地盤である」とはいうまでもない。その中でも、一対一の話し合いである対話・問答が、いちばん初歩的な形態であり、他のあらゆる形態を成り立

たせる基本である。〔まじ〕そして、対話・独話などを一般形態とし、問答・対談などを特殊形態にいられて、問答の性格を説明する。「ところが特殊形態では、話題が一定せられており、また話の進行に於てその話題を闡明し、解決することに集中する。その点で一般形態に比べて著しく知的論証的である。したがってこれらはすでに文化としての話し聞くことばに属する。〔まじ〕と、問答や対談は知的論証的で文化としての話し聞くに入ると、対話より一段高く評価している。

問答の教育上の意義についてはどうであろうか。O・F・ボルノ博士は対話と問答とを特に分けずに「対話の心構えと対話の能力をめざす教育は、人間性をのばす教育のきわめて重要な一部である。」と述べている。さらに民主主義教育のために対話の学習が必要だとし、この「対話をしうる能力は人間に無造作に与えられているものではなく、特別な保護と訓練を必要とする。」もので、これは「教育の課題」であるという。〔まじ〕問答の教育上の意義についてはボルノ博士の論で言い尽くされている。非力であるが、私なりに「教育の課題」に取り組んでみたい。

四 実践経過

1 指導目標

- (1) 自己の話し方・聞き方の実態を知り、反省させる。
- (2) 筋道のたった話し方を考えさせる。
- (3) 反論に耳を傾け、不明な点は尋ね返す態度を養う。
- (4) 問答という言語活動の性格と意義について考えさせる。

2 準備

問答の学習活動は、ほとんど実習である。その際手引きがあれば、実習のため数多くの場所に別れても自主的に学習をすすめることができる。その手引きとしてモデル資料を作ることにした。モデル資料は、問答の録音と、その記録、さらに反省文と評価の基準表である。これらモデル資料は身近な高校生が作ったものが、親近感があつて自分達にもできるといふ意欲を起させるので、同学年の他のクラスの生徒に趣旨を説明し、協力してもらつた。

モデル資料の作成にあつては、いろいろなことを試みて、多くの問題点を見いだすことができた。話題の選定や評価についての問題点は、後にとりあげるとして、その他の試みと、問題点を少しあげてみよう。

まず、録音資料であるが、一回目の録音は、長い沈黙や、「えー」「あー」などの間投詞や、同じことばの繰り返しといった欠点が頻出した。それで、話し癖の把握・反省には適しているが、筋道のたった話し方の検討には不十分である。二回目の録音になると、問答者は、話の進め方もわかり、一回目の反省をも加味しながら話し合えるので、筋道のたった話し方や、相手の意見をよく聞いているか、というねらいに焦点をあてて検討することができる。

問答の時間は、十分間にしたが、それでも後から記録してみると、四〇〇字詰原稿用紙で七枚程度にはなる。記録に時間がかかるので、一〇分程度の問答でも、やむをえないであらう。

話題の選定の時、ある程度内容に立ち入るので全然考えていない

ということはないが、その後の準備に応じて問答は深まり、一〇分間でも充実したものになる。時間の長短よりも事前の用意が大切であるとわかった。

なお、録音の代わりに、問答をすぐメモさせる方法をも試みた。しかし、メモをどの程度したらよいかに迷うことと、相手がメモしている間は発言することができず、話しづらいと訴えたので、直接メモの方は中止させた。

録音機のないベアーのために、筆談のモデル資料も作成したが、この研究に直接関係がないので、その報告はまた別の機会に譲りたい。

3 各時間の概略

指導した五時間の概略を示すと次の通りである。

△一限目▽

- (1) 資料を使って指導計画を説明した。
- (2) 問答の性格について説明した。
- (3) 二年生の「現代国語」(尚学図書)の「対話と論争について」(中村雄二郎)を指名音読させ、形式段落ごとに指導者が要旨を板書した。導入の一環としてであった。
- (4) 男女がベアーになるよう指導者が指名した。但し、お互いの了解があればベアーの変更は自由であるとした。

△二限目▽

(1) 録音式モデル資料を配布し、録音と照合して記録が正確なことを確かめ、問答がどのような雰囲気でなされたか、発音などはと

うであったかを注意させた。

(2) 指導者のリードで、モデル資料(記録)を検討した。検討の観点は「話の進め方で問題となる箇所を指摘し、そこはどうしたらよいか。」である。その外、聞き方のまずさや、話し癖などもとりあげた。後半は四名のグループで、検討を続けさせ、あと全体に発表させた。

(3) 話題の選定をさせた。

△三限目▽

この時間は、録音機のない者のために、筆談のモデル資料の検討、評価の基準などを指導したが、この研究には直接関係がないので省略する。

△四限目▽

(1) モデル問答者の反省文を検討し、反省(評価)の基準をたてた。

(2) 諸注意をした。その要点は、次の通りである。この学習で大事なことは緻密な反省をすることである。問答がまずくても、反省材料は多いと思って、よく検討しよう。さらに自分の話し方・聞き方の欠点は、どこから生じているかを考えてみよう。

△五限目▽

(1) 「現代国語一」(尚学図書版)の「対話と問答」(西尾実)を指名音読させ、段落ごとの要旨を指導者が板書した。まとめのつもりである。

(2) 「問答を学習して」というアンケートを宿題にした。

五 問題点と反省

1 話題の選定

学習を進める上で生徒が最も困ったことは話題の選定であった。それはアンケートで「困ったこと、要望したいこと」の欄に表われている。その欄の内容を列挙してみる。(一クラスのみ調査)

○ 話題の選定に困った。17名

○ 学校は騒しい(場所)。6名

○ 親しい相手だったのでけじめがつかなかった。4名

○ 授業時間内でやってほしい。放課後の実習は気がゆるむ。録音機が重いので困る、貸して欲しい。各1名

では、学習として行い問答にふさわしい話題はどのようなものであろうか。それを調べるため、モデル資料作成の時、後記の三つの話題でモデルたちに筆談をしてもらった。モデル資料は、筆談用と口頭用とを用意したが、話題選定の試みは筆談用の方でしたのである。筆談のあと、その話題の長所・短所について指導者を交えて話しあった。

(1)「李徴の生き方について」

教科書で当時、中島敦の「山月記」を学習したばかりであったので、その主人公をとりあげた。

長所としては、(1)小説学習の続きとしてできるため話題選定に時間をとらない。(2)話題について一定の知識や意見を持っている。(3)相手の意見で、自分の至らない点が啓発される。短所として、(4)反論するため途中でもう一度読み返したくなる。(5)深く読んでいる者

ほど意見が出やすく、読解・読書のつづきという感がある。(6)その小説が嫌いな者は、初めから意欲が湧かない。(7)言語活動そのものの反省よりか、話の内容の質を評価したくなる。

最後の(7)の項目から不適切だと判断した。

(2)「総合選抜制の是非」

本校のある呉地区で二年前から新たに実施された高校入試選抜方法で、モデル達はその方法で入学してきた。

長所は、(1)対立した意見で始められる。(2)言語活動そのものが評価しやすい。

短所は、(1)日常的なものは、話題の選定に時間がかかる。(2)日頃、問題意識をもっている者の方が意見を出しやすいので、対等に意見を出しにくい。(3)感情的発言となりやすい。

(3)「家庭科授業の是非」

二人の意見が一致し、是非論でなく、改善策を述べあう形になった。二人とも関心のある話題であったが、意見の対立がないので緊張した場面にならなかった。

以上の検討から、(2)の「総合選抜制の是非」のような日常生活的で意見の対立するものがよいとなった。短所である「感情を出した発言となりやすい」ことも、それだけ問答に真剣になれることである。そこで話題例として用意したのは次の通りである。

ア、真の友情はあるか。イ、共通一次は是か否か。ウ、異性間の友情は成立するか。エ、高校生の制服は是か否か。オ、クラブ活動と勉強は両立するか。カ、家庭科の男子必修制は是か否か。キ、学習塾は必要か否か。ク、死刑は是か否か。

これだけ、話題の選定について配慮したにもかかわらず、生徒たちはモデル達と同じように最も困った問題であった。彼らは次のようにアンケートに書いている。

「二人が反対の考えをもつテーマでなくてはならず、また、いとおう反対であっても、お互いにその論を推しすすめて問答するとなると、どうも自分の考えも妥協的なものであることに気付くなど、なかなかテーマを決めるのに手こずった。」(T・男)意見の対立する話題が真剣な問答になると思ったのだが、対立する話題を探し出すのに時間がかかる。また、次のように意見は対立しても、高校生に難しい話題は困ることがわかる。「ベアーの主張が同じものが多く結局、死刑の是非を取り上げたが、問答をしてみても二人には少し荷が重すぎて途中でとぎれてしまうことが数回あった。」(A・男)

僅かではあるが、話題を案に選定したベアーもある。「テーマはどちらも興味をもっていたので、すぐ決定した。だから気がねなどしないでベアーを選び、どちらもよく知っていることをテーマに選ぶことはいいいことだと思った。」(N・男)このベアーの話題は「ホークⅡか、GSか」で、二人とも単車に興味を持っていた。

今後の課題として「——について」という話題でもいいのではないか。意見の対立がなくても、二人が関心をもつ話題でいいのではないか。

2 評価の基準

(1) 評価基準の作り方

この学習は、録音のあと、どれだけ深く検討し、反省するかが大切である。その検討・反省の観点すなわち評価の基準は、あらかじめ提示されていなければならない。それが学習目標となるからである。評価の基準は問答という言語活動の性格から導き出されるべきだ。また、実際の問答を検討すれば、どのような問答があるべき姿かということも明らかになってくるであろう。前者としては教科書教材が使えれば簡便だが、普通はそれだけでは不十分である。後者はモデル資料を検討することで可能である。

(2) 理論的評価基準

一 眼目に教科書教材「対話と論争について」を指名音読した後、指導者が形式段落ごとに要約した。この要約が問答の評価基準の一部となるはずであったが、一般論で具体性がないため役立っていない。導入の役割りを果たした程度である。O・F・ボルノー氏の説を紹介したが、アンケートに反応は出なかった。最後の五限目で、西尾実氏の一年の教科書教材「対話と問答」(日本人のことば)を、プリントで学習させたのは効果があった。その教材を役立ったものとして挙げ、その理由として「筆談を終えてやったのでとても勉強になった。後から読み直して自分の長所短所というものがよくわかりました。特に短所というものが目立った。それを改めるのに『対話と問答』というのは実に良い教材だと思う。」(N・男)と筆談でも役立ったといっている。「考えさせられる点がいくつあった。これは実習の後に習ったのであるが、実習の前にやっていたらもっとよかったと思う。」(Y・女)と実習前に読めばもっと役立ったであろうと言っている。実習の後だから一層切実に読めたという点も

あるが、原則として、実習前に手引きとなるように扱うべきであった。高校生に適する理論書を用意することが肝要である。

(3) モデル資料（記録）の検討

モデル資料（記録）の検討は二限目に実施した。まず、記録と照合しながら録音を聞き、間投詞まで正確に写されていることを知らせ、言語活動の実態を知るには、正確さが不可欠であることを認識させる。同時に、アクセントや、イントネーションなどは文字では書き表わしにくいことを知らせる。統けて本文の検討に入る。

「A1 それでは今から問答を始めます。クラブ活動と勉強は両立するかという事ですが、ぼくの意見は、それは両立するのではないかと、という意見です。（指摘―話題が冒頭に明示され、自分の主張も明確にした。）まず、クラブ活動と勉強の両立という事を考えるにおいては、そのクラブをする事によって失われる時間という事が、まず、問題になると思うんです。（指摘―問題点提示）その時間のことについて、ぼくはこう考え、こう考えるんですが、あの、時間がなくなる、なくなるというても、そう一日は24時間もあるのだから、学校が終って、帰って食事とか風呂に入る時間、それから勉強というのがある程度残ると思うんです。（指摘―具体例をあげて考えようとする）」（以下、資料2参照）このように、記録の冒頭をとりあげ、一斉学習で話の進め方と話し癖を検討した。残りのページは、四名のグループで検討させ、あと、全体に発表させた。検討の方法を知った生徒は、真剣な態度で残りを組上にあげていった。

(4) モデル資料（反省文）の検討

モデル資料の中の反省文が、評価基準として役立つ。それは、基準が具体的に示されているからだ。モデルたちと指導者が、一緒に録音を聞き、記録を検討しているので、反省文の中には指導者の見方も入っている。

「自分がした問答の記録を、後から見るとするのは、なかなかおもしろい事である。今まで知らなかった自分の一面を見いだせること請合いだ。」

今回の問答で、気づいた事をあげてみると、まず第一に、A1において自分の主張を一番始めにもってきた事である。これ、相手に自分の考えを早く伝えるという点において、よい事ではないだろうか。第二に、B1以降において、まず一応相手の意見を認め、それから反論を出している事である。これは問答が感情的にならないようにする働きがあると思う。また、話の終りは『……と思います』とか『○○さんどうですか？』という形にした方が、『……』と思いません。』とするよりも、相手にとって、話し始めやすくなると思う。第三に、言っている事が、問答のテーマから、はずれてくるという事である。（A1 10 / 15 など）これは、絶えず『自分は今○○について話しているんだ。』と頭に置いておく事を、怠った結果であろう。そういう事を頭に置かず話していると、話がどんどん流れていってしまう。文章でなく、話しているのだから、その話がずれるという程度は相当である。また、一文が非常に長い。これは、話し言葉の特徴であろうが、反省すべき点である。一文が長いという事は、そう入句が多いという事で、その結果、主語・述語の関係がわかりにくくなる。

次に、話しぐせについて。自分で喋っている時は、それほど気がつかなかったけれども、後からテープを聞いて見ると、なんと『えー』『まあ』『あの』の多い事。また、そういう言葉は、聞いていて、わりと耳ざわりであった。相手に不快感を感じさせないためにも、自分で努力して直す必要があると思う。

話は急に変わるけれど、実は、この問答は、最初に一回試していたのである。それでも、このように話に不自然な所がある。我々は、日常の話し合いで、かなり、好い加減な事を言っている。しかし、お互いが、話の調子とか雰囲気や納得してすませている。話し言葉だから、互いに意志が通じさえしたら、それでいいじゃないかという人もいるだろう。しかし、言葉とは、そんな程度のもなのだろうか。いや、何かが間違っている。そう何かが……。」(O・男)

O君の相手になったT子は次のように反省文を書いた。O君を文中で仮にA君としている。

「まず、話のすすめ方について書いてみます。

B₁で最初に私はその前のA₁を肯定します。そしてその後、自分の最も言いたい主張を述べました。相手の意見も納得できると思えば取り入れ『それでも』と思う部分を、主張に基づいて例もあげながら述べたのですから、これはまず良かったと思います。

B₂では『そういう時』という言葉が3ヶ所に出てきます。特に最後の2行にある『そういう時』は聞いているだけではわかりにくいと思うので、何を示すか具体的に書いてみます。まず、No.26では44の『不意の行事の時』、次の40では不意の行事が受験前や試験前を

重なった時、最後の41は40と同様です。40か41のどちらかに『重なった時』という言葉があれば、もっと明確であったと思います。

B₃ではB₂でも問題にしたように最後の2行にある指示語『そういうふう』が何をさしているのかはつきりしません。このはつきりしない一語のためA君も迷い、次のA₄で話が転換される大きな原因となりました。最後の『そういうふう』と『けじめのつかない人や実際にクラブをやめてしまった人についてはどう思いますか』とわかりやすく質問すれば良かったと思います。

最後のB₄では、私とA君のクラブを続ける期間はどうかという前提に相違があったことに気づき、A₂の中にあつたA君の体験を思いあわせると両立も可能ではないかという見解に達しました。

次に私の話し癖について反省しますと、問答全体に『えー』という言葉が目立ちます。二人で問答したため相手の話を聞く間に自分の意見をまとめるわけで、いざ自分が言うとなると間をあけてはいけないということに気をとられて、間の代用品として『えー』が出てきたようです。でもテープを聞いていると何の気なしに使った『えー』がとても聞きづらく、相手にも不愉快な印象を与えてしまうような気さえします。

今後は意識的に『えー』を言わないようにしたいと思います。今迄、述べてきたように、この問答をして私は自分の日常の会話が無意識のうちに乱暴に使われつつあるのを痛感しました。何をすることも言葉なし、会話なしでは通用しません。言葉の乱れ、会話の乱れに気付いた今、この今から、自分の人間関係を円滑にはかる意味でも改めてゆきたいと思いました。」(T・女)

この二つの反省文から、次のような評価基準を見つけて板書した。

- ① 文脈の中でことばの意味をとらえているか。
 - ② 相手の意見を充分理解しているか。
 - ③ わからないことは問い返しているか。
 - ④ 説明不足はないか。
 - ⑤ 感情的になっていないか。
 - ⑥ 主張を冒頭に出しているか。
 - ⑦ テーマにはずれた発言となっていないか。
 - ⑧ 挿入句が多くて、一文が長くなっていないか。
 - ⑨ 非完結性の話し方になっているか。
 - ⑩ あいまいな指示語を使っていないか。
 - ⑪ 話の前提を確めているか。
 - ⑫ 具体例をあげているか。
 - ⑬ 話し癖はないか。
- 以上は、一斉学習やグループ学習で見つけたものである。自分の話し方、聞き方の欠点をあげるだけでなく、その原因まで探ってみよと指導した。
- 生徒は、これらの検討基準が実習で役立ったとアンケートで述べている。「実習に役立ったことは録音式・筆談式のモデルたちの反省から導き出した検討基準です。問答する時はもちろん、反省する時に自分では気がつかなかったような反省が見つかり、検討しやすく非常に役に立ちました。」(O・女)

しかし、評価基準を金科玉条のように考えると、そこからは、ま

た次のような問題点が生ずる。

3 モデル資料の問題点

O男はモデル資料を「これら」といって、次のように述べる。「これらは非常に役立った。参考とする上で一つの指針というものになり、やりやすかったことである。しかし、問題点としては、一つの形式的なものとなり、問答の仕方の変化が見られないことであろう。型にはまりやすい欠点をT男もとりあげている。「話し癖については、このくらいにしておいて、答問の進め方に目をやってみたいと思います。答問の進方の型がなんとなく一つのパターンになっているように思えるのです。まず、僕が相手に問いかけをして、相手の主張、それを僕が肯定して、自分の主張をして相手に問いかけ、というふうなぐあい。問答はもとと一問一答で進むものだが、その中に充実感がないと型にはまった感じになる。また、「主張を冒頭においているか。」「非完結性の話し方になっているか。」などを守ろうとすると型にはまりやすい。

今後の課題として、モデル資料を検討する時、主張の置き場所、非完結性の効果など、おのずと自由に討論しておくようにすれば、型にはまる虞れは消えるであろう。それに加えて問答の質を高める要素としての相互補完性など、人間味につながるものをも配慮させるべきである。

手引きとした問答の記録は当事者が作成したものである。記録文作成のモデルともなるから、その面からの課題もあげる。

段落をつけた記録としたい。段落をつけようとすると、意見と事

実は分けて話しているか、整理された話し方になっているかという評価意識が働く。

実習のため、記録と録音とだけを手引きにすると、問答者の態度はどうであったかという問題が残る。それを補う方法として、教師が観察していて、記録の中に添加する方法も考えられる。例えば「A ①それはそれで……。困って、メモをみたり、横をみたりした」というふうに。これで、話し方は、態度が重要な評価の対象であることがわかるであろう。

手引きとして、モデルたちが用意していたメモも必要ではあるまいか。メモと実際の問答とは乖離が生ずるであろうが、それはどこに原因があったかという検討もできる。

4 場所・時間などの問題点

実習は、録音・再生が主であるから、一教室でいくつものペアーが実施することは不可能である。各時間の概略でみた通り、授業は実習に取り組むための準備であり、評価の基準を学ぶ場であった。では、生徒はどのような場所、どのくらいの時間をかけて実習したのであるか。その中に問題点は潜んでいないであろうか。

(1) 場所

実習をした場所を表にする。(一クラスののみ)

ペアー数	8	5	4	2	1	1	1
実習場所	自宅	H R	道教室	食堂	L L	庭	裏談室

自宅や裏庭を使っているのは、場所に困ったことを示している。先に挙げた「困ったこと」でも、話題に次いで「学校は騒しい(6名)」が多かった。静かな雰囲気でも問答し、録音したいので、適当な場所の確保に困っていた。

(2) 時間・録音回数

場所が問題になるのは、時間にも関係がある。10分間の録音といっても、録音を繰り返したり、あと記録したりすると、案外時間がかかる。

ペアー数	5	7	4	1	1	2	1	1
所要時間	2	3	4	5	6	7	8	2日

平均3.8時間かかっている。

ペアー数	3	7	8	3	1
録音回数	1	2	3	4	5

指導では2回目を正式録音とするようにしていたが、途中で笑ったから、話とぎれたから、録音時間が延びたから、雑音がはいったからといった理由で3回以上になったと回答している。一回の者は、うまくいったから、時間がなかったからと理由をのべている。記録するのは自宅でもできるので、録音する場所を確保しなければならぬ。特別教室など予約しておくべきだった。

六 学習の効果

問答の学習で、どのようなことを生徒は学んだのであろうか。

語彙の使い方を反省している者がいる。「問答のうちで、自分は納得して使っていることばでも相手は理解できていなかったり、ということがあるので、ことばはもつと的確に使わなければならぬ」とわかった。」(T・女)

一文のまとまりや、具体例の欠如など表現を反省している者がいる。「もう一つ、つながりのはつきりしない理由は、意見をのべることばの文章の形にあると思う。K2の26〜96『ホントに……わけです』では、ちがった内容のことまで一センテンスの中におさめてしまい、主述も、いいたいこともぼやけている。もつと簡結に言い切ることが必要だと思う。」(K・女)「全体を通して私の話しは、あまり例があげられていませんでした。だから相手に対する説得力が弱くなっているように思います。」(A・女)

A女はさらに聞くことの難しさにふれている。「私はこの問答を通して言葉を使うことの難しさ、また、とっさに相手の言った事を理解し答えることの難しさを感じました。」相手の意見をとっさに理解する能力を鍛える方法はどうしたらいいのであろう。大きな課題である。聞くことについては次のT男のように気づくだけでも効果は大い。「自分はけっこう人の言うことを聞いて話すほうだと自分で思っていたが、実際はほとんど自分の考えを言いはるにすぎないことがわかった。」

話し癖の把握は、ほとんどの者がしている。後から録音を聞いたり記録を読んだりすると、まっ先に気がつくからである。「問答して最初に気づいたことは、途中で何を言っているかわからなくなつた時に、『うん』とか『あ』とかのことは多く使っていることで

す。これは前もって考えていたことを忘れてしまつて、それを思い出す間の時間を埋めるために発せられたものだと思います。こんな事をなくするために、自分の言いたいことをメモしておくといいと思います。」(N・男) N男は話し癖の原因から、その対策まで考えている。

日頃、問題意識をもっていないことを反省している。「僕自身はたいへん役に立ったと思う。なぜなら前述した通り録音によって自分のことばを客観的に検討することができたからだ。そして平素物事に對してあまり問題意識をもっていないことも気づかされた。」(S・男)

七 今後の課題

学習の質を高めるために、録音の聴取によりアクセントなど反省を深めることが残っている。もう一つは、記録から問答の尋ね返しや相互補充性などを究めていかなばならない。典型的なモデルをどの段階で提示するかという課題もある。問答は聞くこと・話すことの土台として多くの教育的内容を含有している。場所さえ解決すれば、生徒は喜んで取り組む実習だけに、今後も積極的に試みてみたい。

注1 「話し方・話しあい・話しことば」石田佐久馬著 東洋館出版

版社刊

注2 「日本人のことば」西尾実著 岩波書店

注3 「言語生活の探究」西尾実著 岩波書店刊

注4 「言語と教育」八増補版V・O・F・ボルノー著 森田孝訳

他に参考にした本

「国語科 対話の指導」倉沢栄吉・青年国語研究会著 新光閣

「話ことば学習論」野地潤家著 共文社

資料1 話題一覧表(二クラス分) 数字はペーパー数

「死刑は是か非か。6」「安楽死を認めるか。4」「クラブ活動と勉強は両立するか。3」「総合選択制の是非。3」「学習塾は必要か。2」「試験管ペビーについて。2」「芸術時間の有無について。」「数ⅡBは選択にすべきか。」「家庭科の男子必修制は是か非か。」「義務教育以上の学校教育は必要か。」「共通一次試験試験は是か非か。」「制服の是非」「早弁はよいか。」「掃除をさぼった時に罰を与えるべきか。」「男女交際と勉強は両立するか。」「高校生の男女交際について。」「男女間の友情は成立するか。」「同性間の愛情は成立するか。」「真の友情はあるか。」「結婚は、見合が有利か、恋愛が有利か。」「女性の職業観について。」「自殺について。」「好きな本を読むか、嫌いでも利益を考えて読むか。」「左ききと右ききとは、どちらがよいか。」「現代のポップミュージック界は停滞しているか。」「400CCバイクは何気筒が適当か。」「ホークⅡか、GSか。」「国防費の予算について。」「

資料2

本文中に引用したモデル資料(記録)の続き。題は「クラブ活動と勉強は両立するか。」「

「で、クラブをやっていない人は、そういう時間にテレビとか読書とか自分の好きな事やっているわけで、クラブをやっている人は、その時間をクラブ活動に当てているわけですが、そうした場合、読書をしたりテレビをみたりするのも大事な、大事なという意味のある事ではあると思うけどもクラブをやる事……クラブも、大変、意味のあるものだから、それはそれで……クラブ活動というものは勉強と両立するのではないかと思うのですが、Bさんどうですか。

B1 えー、もちろん、クラブ活動をしていた方が、自分が家へ帰って一人で過ごしているよりも有効なことというのは、たくさんあると思います。でも、やっぱり勉強と両立するという立場においては、えー困難じゃないかという気がします。え、たとえば、クラブ活動でも文化系であつたら、そうでもないかもしれませんが、体育部なんかだったら、練習が厳しくて家へ帰っても眠くて眠くて勉強できないとか、それから、えー、疲れが出て、次の日にまで残ってしまっているというようなことで体をこわしたり、そういうことで勉強に支障をきたすっていう事も起こってくるんじゃないかと思えます。私は文化クラブに入っているから、それほど、体操……体育部の事はよくわかりませんが、それでも、えー疲れているんじゃないかなっていうような友達をよく目にしますし、え、勉強との両立という面においても辛いっていう事を、実際、耳にしたりするから勉強との両立は難しいんじゃないかと思えます。

A2 えー、運動クラブをやっていた場合、精神的、肉体的に疲れるという事は確かだ、ほくも中学校時代運動クラブに入っていて中学校としては厳しい練習だったんですが、それで家に帰って勉強

をしたくないというのが普通で……普通だったんですが、そういう時に、え、一つ気分を転換するという意味で、ぼくは家から……家に帰ってから、え、一、二時間寝ていたんです。それで、一、二時間寝るといふのは短い睡眠時間で体を休めるというまでではないかなかったと思うんですが、それでもクラブか、クラブと勉強の境目をつくるという意味で、その二時間の睡眠時間というものが、大変役にたったと思うんです。だから、このように睡眠時間をちょっととるとか、あと風呂に入るとか、また、他にもあると思いますが、気分転換……えー気持のけじめ……かわりを、かわりめをつけるという意味……という方法を、何か自分なりに考え出して実行したならば、え、それが運動クラブで体が疲れていても、どうにか、両立できるのではないかと思います。

B2 えー、A君の場合はすごく勉強とクラブの両立について考えていて、それで、計画をたてて、それを強硬に実行しているってことは、すばらしいなと思いました。でも、やっぱり、クラブ活動をしていると、え、肉体的な面はそれで補えたかと仮にしても、えー、不意の行事とか、例えば文化祭とか、体育祭とかの場合に特別にそのクラブで発表しなければいけないとか、そういう時には肉体疲労だけではなくて精神的に、ずいぶん負担がかかると思います。そういう時に、えー、まあ、普通の状態なら、だれでもやりこなせると思います。受験を目の前にしていたり、試験前だという時は、やっぱり、人間誰しも動揺すると思うし、そういう時に、クラブ活動なんてと思うようなことが、まあ、大いにあると思います。そういう時に、えー、クラブ活動を押しすすめるっていうのも、無理な注

文で、そういう時は、やっぱり両立し難いんじゃないですか。

A3 そういう特別な行事の点について、ぼくは、え、考えるんですが、そういう時に、勉強が遅れるとか、そういう事を考えていたのでは、確かに、なかなか……結局は、両方共だめになってしまったというようになると思うんです。それで、行事がある時はもう、はつきり言えば、勉強の方を捨てるというか、勉強は投げて、その行事に力を入れた方が、ぼくはいんじやないかと思えます。そして、それが成、成功させて、そして終わったら、そこで……まあ、ここは本人の、え、気持ちにかか、かかってくるんですが、心機一転という感じで勉強に力を入れたいんじゃないかと思えます。

B3 そういうふうに、はつきりけじめのつく人はいいけれども、たいていの場合、どっちもうわついた気分が終わってしまったって、結局二兎追う者は一兎も得ずというか、えー、両方こなせるという人は、ほんと、ごくわずかだと私は思います。で、えー、努力をして、A君のように、成功させられる人もいるけれども、やっぱり難しくてやめてしまうっていう人も私のまわりにもいるし、え、まあ、私も、もし、運動クラブだったら、そういうふうになるんじゃないかっていう気がするんですけれども。そういうふうな面ではどうですか。

A4 えー、さっきから、こう……結局、両方共だめになってしまふという……ことで、その、クラブ活動を続ける期間というものが、ちょっと気になるんですが、……ぼくの場合は、一応、三年生の一学期までなら、両立は可能だという意見で、それまでなら、確

かに、三年生ともなると、受験というのは、迫ってくるわけですが、それでも、一学期の間なら、まあ、どうにか、両立できるのでは、という考えで、言っていたんですが、Bさんは、その、不可能ではないという意見なんです、それは、え、いつ頃までやっていたら、不可能であるという意見なんです。

B4 あ、えー、わたしは、クラブ活動が、さきほど言いましたように、文化系ですし、自分のいきたい方向と、ほぼ一致しているので、ずっと三年生の終りまで続けるつもりでした。だから、えー、それ、わたしと同じように最後まで統ける人は、両立って言う事が難しくなるんじゃないかって思ったんですけど、今、言われたように、えー三年生の一学期あたりまでなら、え、たとえ運動クラブでも、たい、大変な努力はいると思うけれども、努力して、計画して、それを実行するだけの勇気さえあれば、クラブと勉強は両立できるかもしれませんね。(九分三〇秒)

(広島県立呉三津田高等学校教諭)